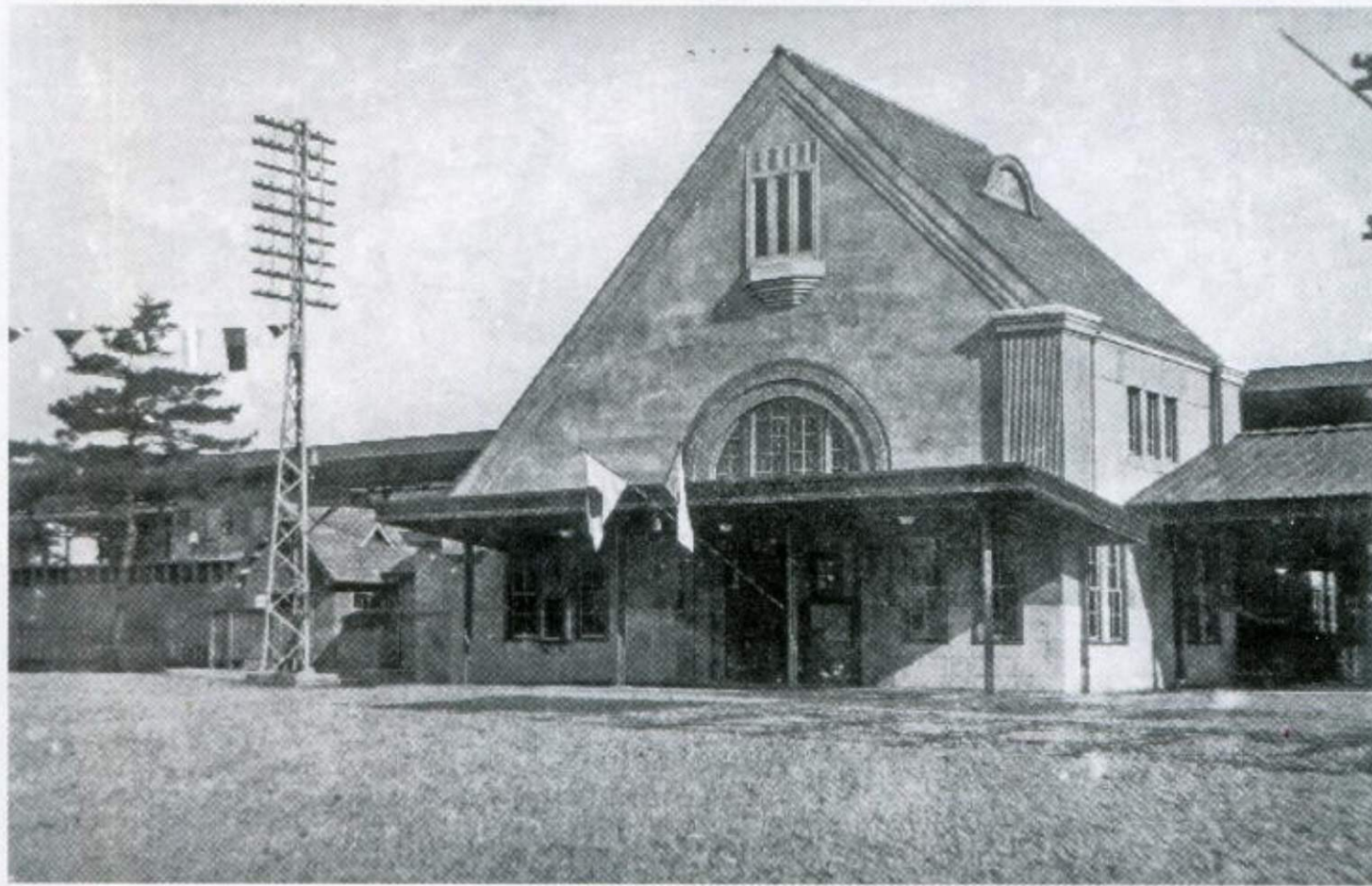
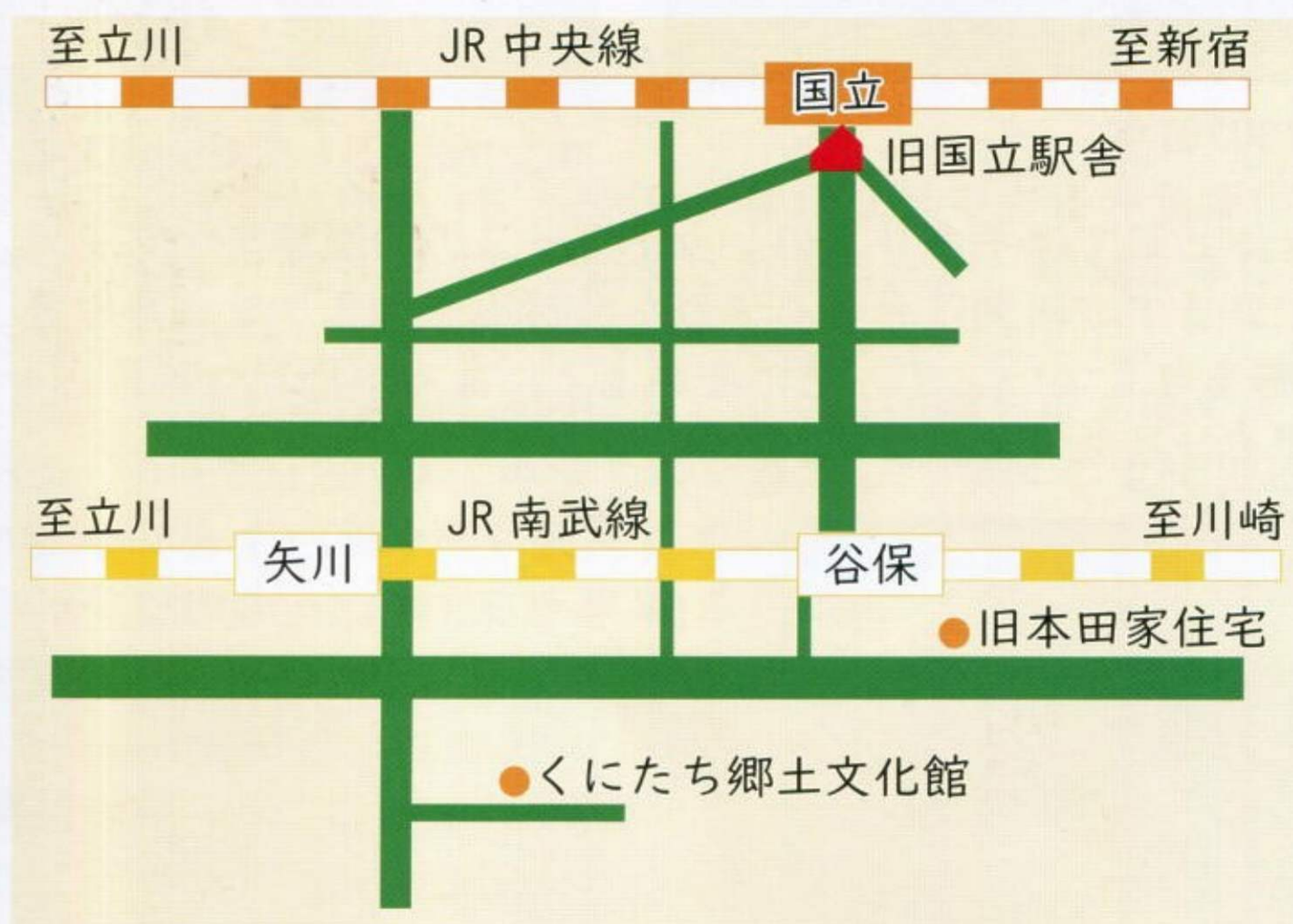




国立駅舎 大正 15 (1926) 年 明窓浄机館所蔵



アクセス：JR 国立駅南口より出てすぐ

	広 間	まち案内所・展示室
平日	午前 7 時から午後 10 時	午前 10 時から午後 7 時
休日	午前 9 時から午後 10 時	午前 9 時から午後 7 時

休館日：年末年始・清掃などの臨時休館日

旧国立駅舎

〒186-0002

国立市東 1-1-69



旧国立駅舎ウェブサイト



X (旧Twitter)

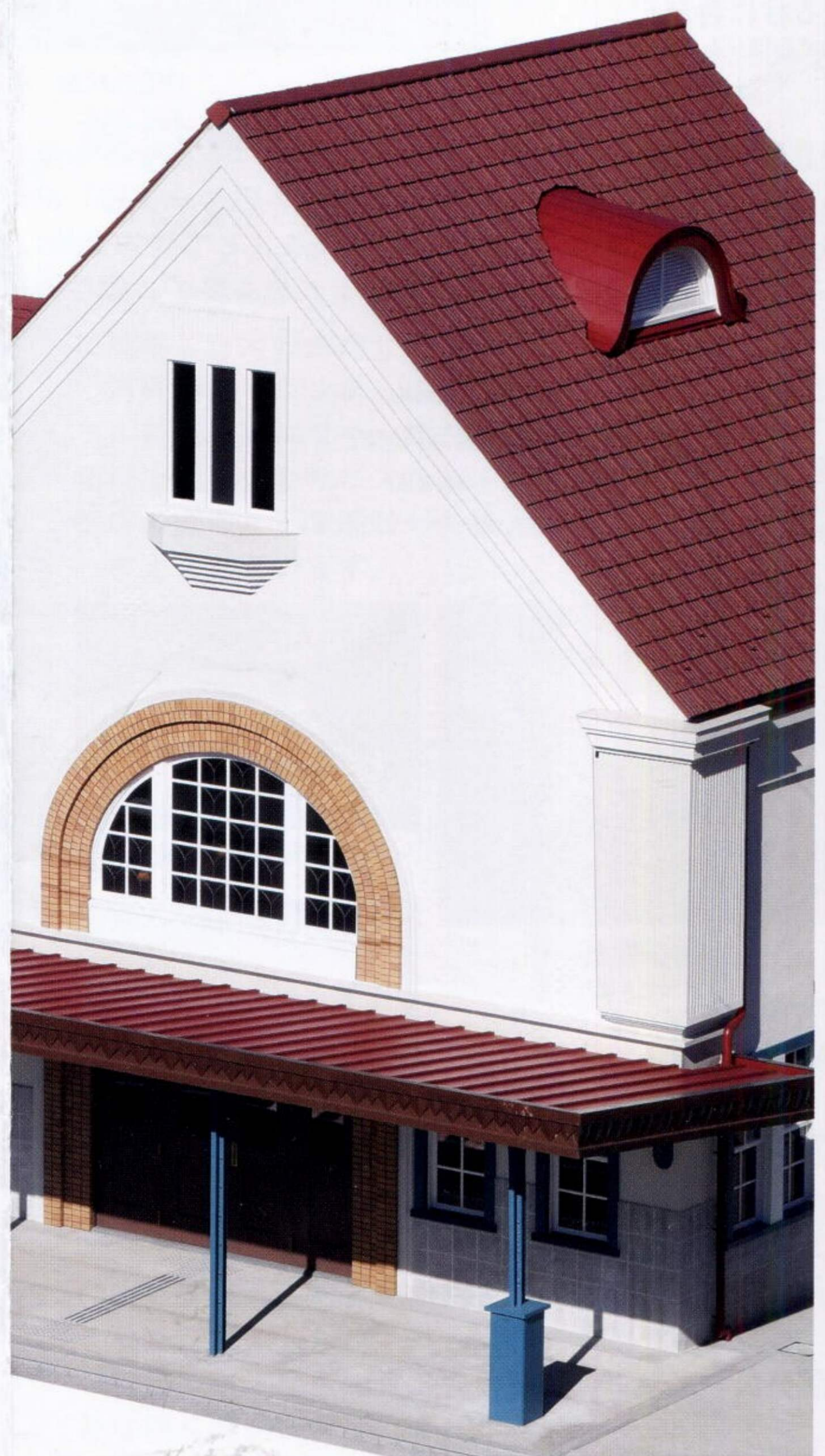
発行元：国立市教育委員会教育部生涯学習課

〒186-8501 国立市富士見台 2-47-1

☎ 042-576-2111 (内線 323)

URL <https://www.city.kunitachi.tokyo.jp>

国立市指定有形文化 旧国立駅舎



駅のはじまり

大正15(1926)年4月1日に開業した国立駅は箱根土地株式会社が建設し当時の鉄道省に寄付した請願駅(※1)でした。民間企業が建設した請願駅の現存例は全国でも数少なく、貴重な事例です。

開業当初、「赤い三角屋根に白い壁」という典型的洋館風の駅は箱根土地の開発した分譲地(国立大学町)の広告塔として大きな役割を担ったものと思われ、当時の分譲広告には駅舎の写真が大きく掲載されました。

※1 請願駅：地方自治体・地元住民・民間企業などの要望により開設された鉄道駅

設計者

旧国立駅舎の設計者は、「箱根土地会社のライト式建築のベテランで河野という人」という記録があり、近代建築の三大巨匠の一人に数えられるフランク・ロイド・ライトに師事した河野傳だと考えられています。

河野傳はフランク・ロイド・ライトの下、当時の帝国ホテル新館・通称ライト館の建築に携わりました。その後、箱根土地株式会社に入社し、目白文化村の住宅や渋谷区百軒店の劇場などを設計した後、国立駅舎の建築に携わったと考えられています。



展示室(旧手小荷物扱所)



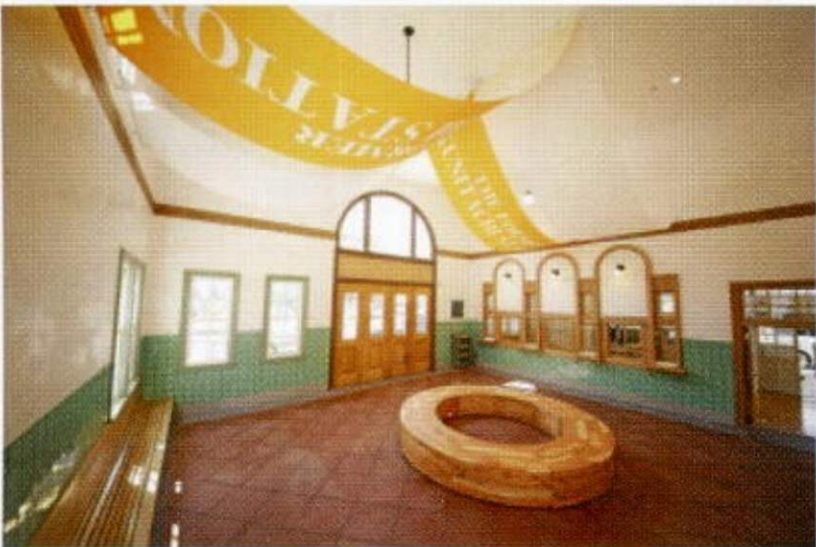
まち案内所(旧出札室)

保管室、駅長室、宿直室などの業務部門が置かれていました。広間には腰掛が置かれるなど、出札室と同時に待合室の機能を持ち、幅2間(約3.6m)の両開き戸と大壁に囲まれた空間でした。

再築工事では旧国立駅舎の創建時の間取りに復原し、可能な限り忠実に再現しました。



国立土地分割売出し
くにたち郷土文化館所蔵



広間(旧広間)

建築当初、駅舎の間取りは間口5間(約9.1m)×奥行4間半(約8.2m)の広間を中心に、西側に

出札室、手小荷物扱所、

国立市指定有形文化財(建造物)

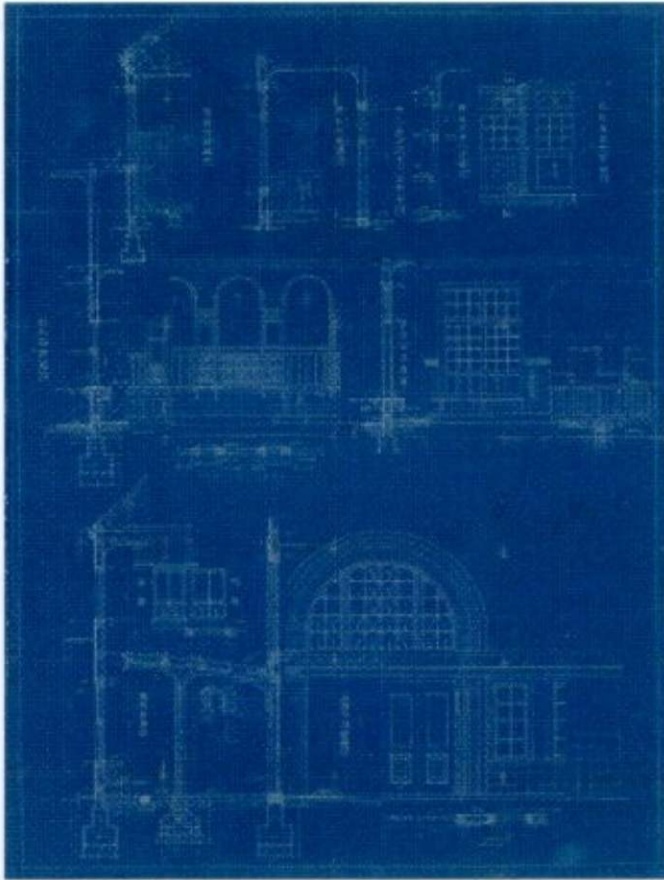
旧国立駅舎は近代国立開発の数少ない象徴的な歴史的建造物として高く評価され、平成18(2006)年に国立市の指定有形文化財(建造物)に指定されました。

主要な文化財指定のポイント

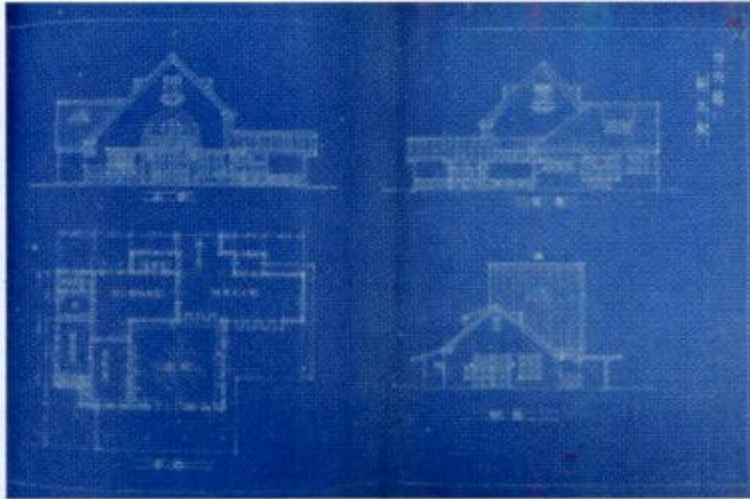
- 一、三角屋根の強い個性の意匠をもち、大正期木造駅舎としての希少価値が高い。
- 二、大正期の国立学園都市計画の中で国立駅舎が重要な位置付けにあった歴史的環境。
- 三、基本的な構造、いわゆる軸組み、小屋組がよく残っている。
- 四、明治期から大正期にかけての典型的な構造技法であるキングポストトラスなど、技法的、技術的に重要である。

解体、そして再築へ

旧国立駅舎は平成18(2006)年にJR中央線の高架化工事に伴い、惜しまれつつ解体されましたが、解体工事は丁寧に行われ、部材は市が大切に保管していました。用地の確保や建築基準法の壁など様々な困難を乗り越え、平成30(2018)年に再築工事を着工し、令和2(2020)年4月「まちの魅力発信拠点」として開業に至りました(元の位置から西に約3.2m、南に約4.9m移動)。



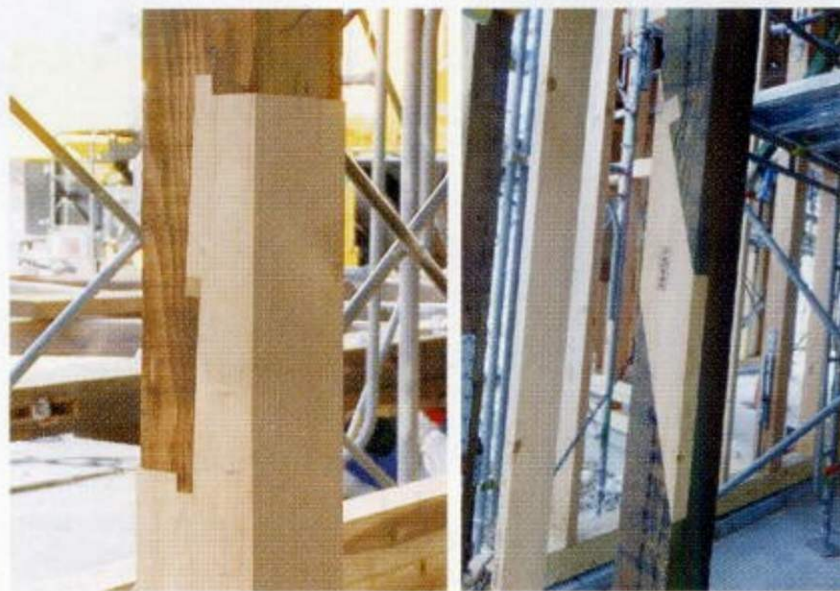
かなばかりす
矩計図 大正15(1926)年頃
プリンスホテル旧蔵資料



平面図立面図 昭和4(1929)年頃
鉄道博物館所蔵

解体部材は1本1本調査し、総数4200点もの文献や史料が集められ、創建当時の写真や図面の分析をおこない、復原計画を作成しました。

既存部材は劣化した木部を根継ぎ、矧木といった伝統的な技術を用いて補修し、構造部材の約70%という高い再利用率で復原することができました。



根継ぎ

矧木

ドーマー窓

建築当初はドーマー窓（屋根窓）が4か所ありました。過去の修繕により取り外されましたが、再築工事において復原されました。

レール柱

解体時、正面の底部分の柱や改集札口上屋構造材などには古レールが使われており、当時の資材の流通状況を示す貴重な史料でした。現在はそのうちの2本が底を支える柱に再利用されています。



建物の高さ（約12.4m）

浴場窓

ロマネスク風の浴場窓（半円アーチ窓）には銀杏型の棧が入れられ、周囲には化粧タイルが回されています。

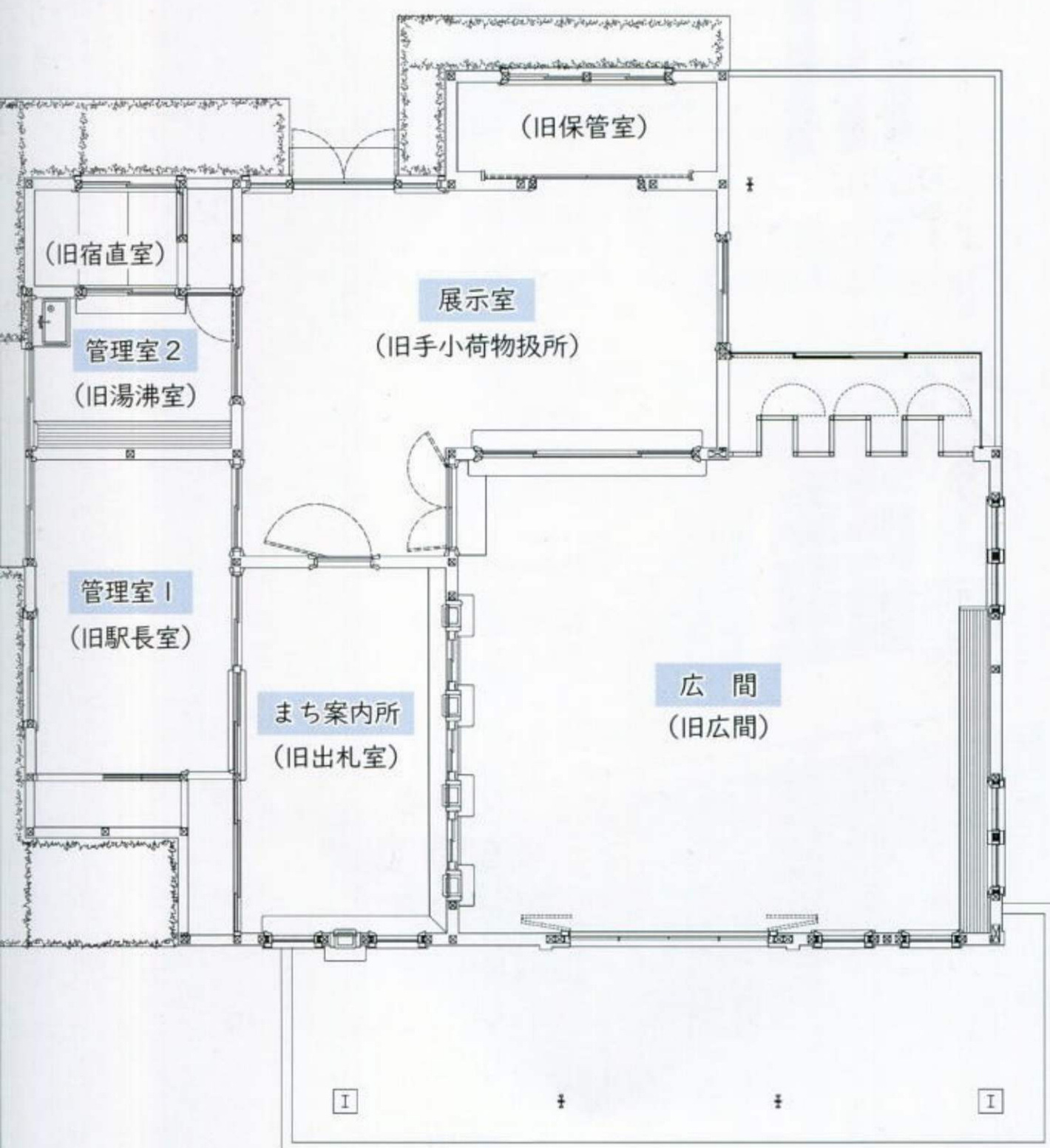


キングポストトラス

旧国立駅舎 令和2(2020)年

キングポストトラスの小屋組み

旧国立駅舎は赤い三角屋根に白い壁、ドーマー窓などを配し、全体としてはイギリスのレッチワースの田園都市住宅風のデザインに大駅舎でも用いられる浴場窓（半円アーチ窓）がついています。西側に大きく流れた非対称形の大きな三角屋根が屋根を軽く見せており、大きな底^{ひさし}を設けることで建物全体に安定感を与えています。更に底の上下にある浴場窓（半円アーチ窓）と広間入り口をロマネスク風にまとめる事で、個性的なデザインとなっています。

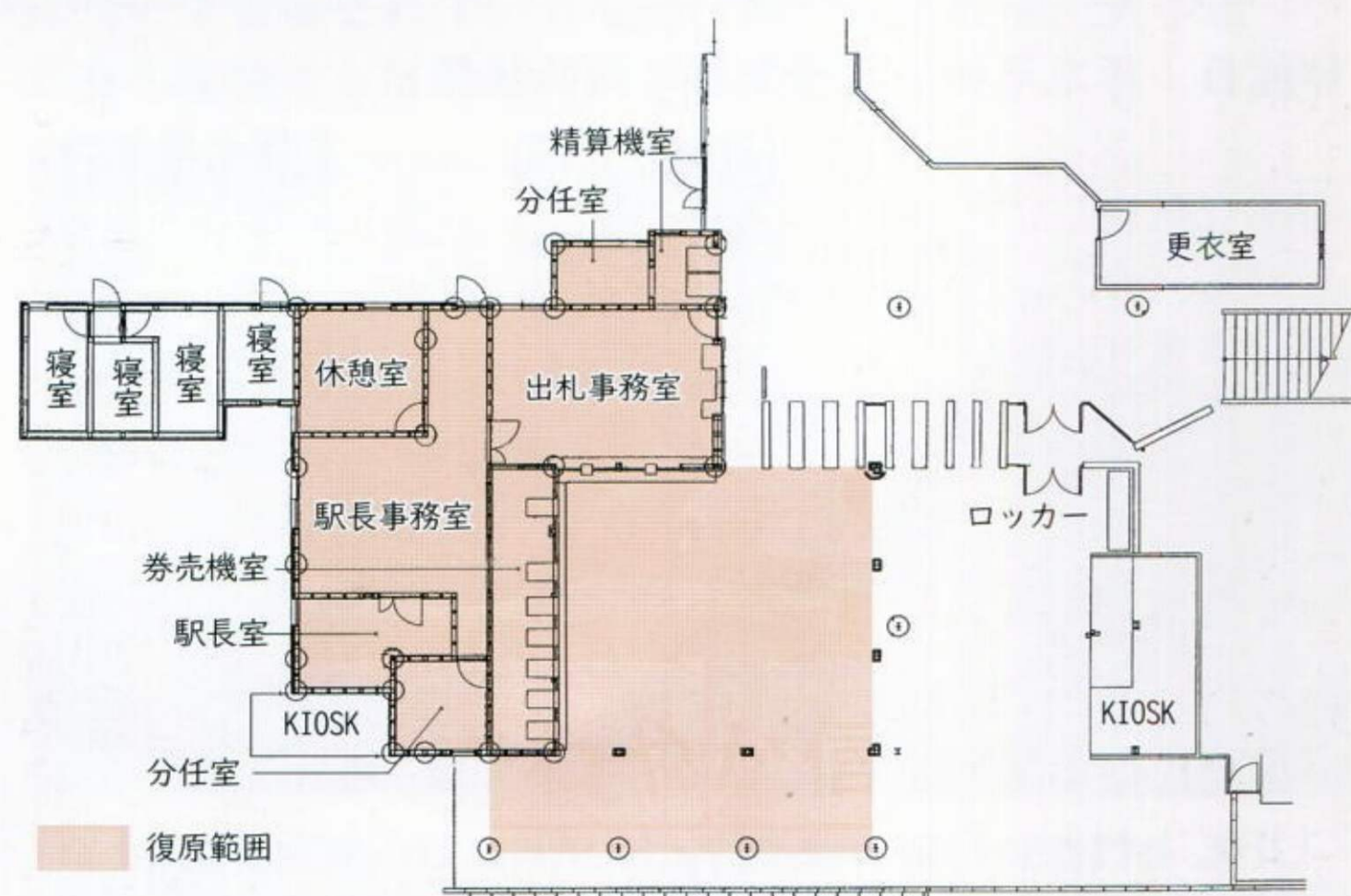


復原後平面図



国立駅舎 平成11(1999)年

大正15(1926)年の創建以来今日まで、まちのシンボルの一つとなっている旧国立駅舎は、時代による駅の機能の変化、利用者の急増により、駅舎の間取りは何度かにわたり改装されていましたが、外観意匠を変えないよう、柱配置などが考慮され、建築当時の様子を良好に残していました。



解体前平面図 平成11(1999)年

国立大学町の誕生と旧国立駅舎

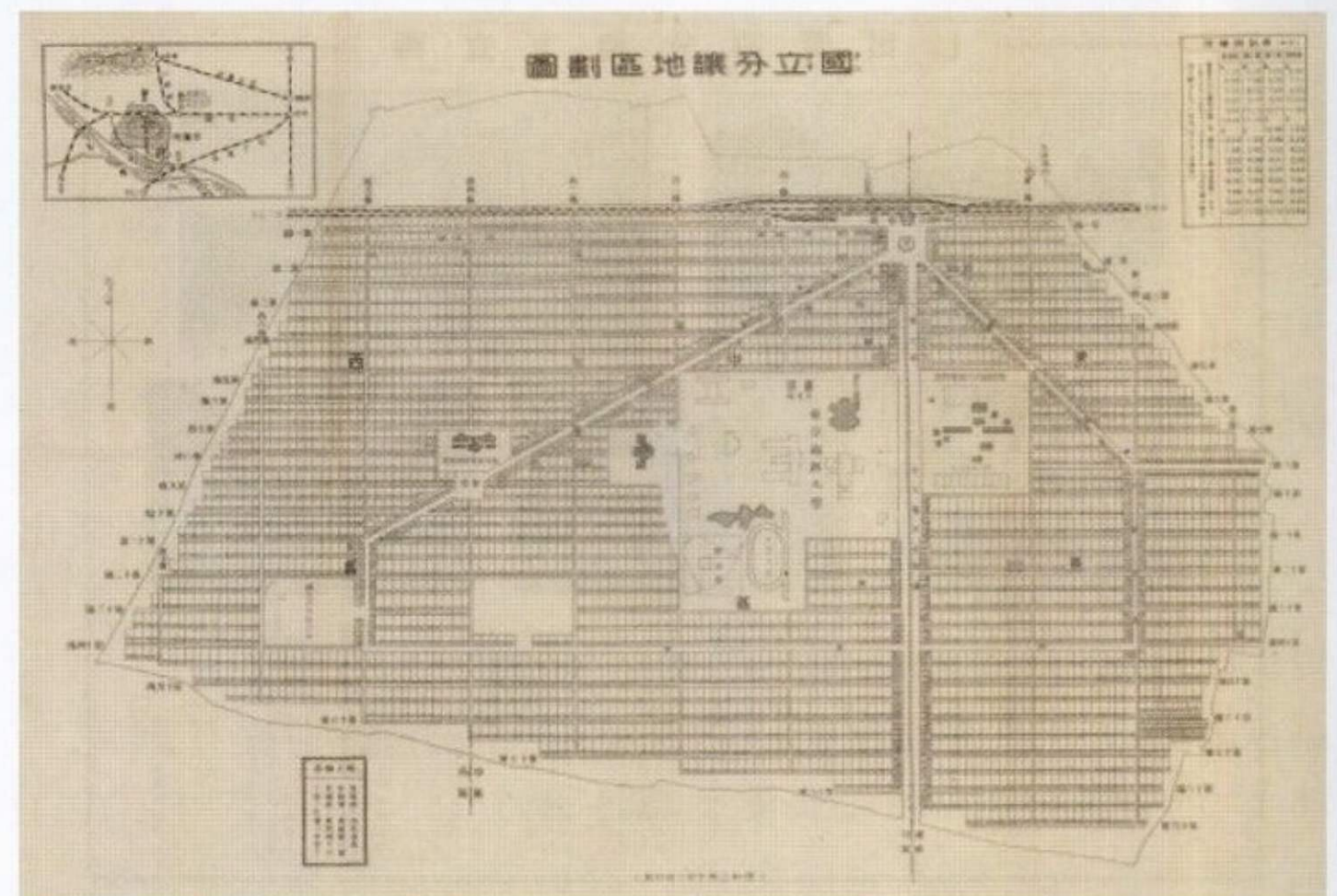
国立市域のうち、南武線以南の地域は、江戸時代に甲州街道沿いの農村として形づくられました。一方、南武線以北の地域は「ヤマ」と呼ばれ、大正時代になっても、ナラ、クヌギ、クリなどの雑木の間に点々とアカマツの大樹が混じる雑木林で、人家は一軒もなく、キツネやタヌキに化かされた話も出るほどでした。そんな「ヤマ」は国立大学町開発という新たなまちづくりの舞台となっていきます。

大正末期、西武グループ創業の祖・堤康次郎が経営する箱根土地株式会社（現株式会社西武リアルティソリューションズ）は、東京商科大学（現一橋大学）と共に、理想の学園都市を目指し「ヤマ」の開発に着手します。国立大学町の誕生です。中でも、国立駅舎は国立大学町開発に当たって最初に構想され、まちの構造や景観の中心に位置づけられました。それから約80年、その姿はまちのシンボルとして長く人々に親しまれ、守られていくことになります。

和暦	西暦	事 項
大正 12	1923	関東大震災
大正 14	1925	箱根土地株式会社が鉄道大臣に駅新設の請願書を提出
		箱根土地株式会社と東京商科大学（現一橋大学）が「土地交換契約」と「覚書」を締結
		国立駅舎新築工事着工
		国立大学町の分譲が始まる
大正 15	1926	国立駅開業
		国立音楽大学が移転、校舎竣工
昭和 2	1927	東京商科大学商学専門部・商業教員養成所が国立に移転
昭和 4	1929	国分寺～立川間で電化工事が完成し、電車運転を開始
昭和 9 昭和 10	1934 1935	大学通りに桜の植樹が行われる
昭和 26	1951	町制施行・谷保村が国立町となる
昭和 27	1952	国立町文教地区が建設大臣の正式許可を受ける
昭和 34	1959	国立駅北口開設
昭和 39	1964	東京オリンピック開催 (10月8日に聖火ランナーが国立町内約1.5kmを走る)
昭和 42	1967	市制施行・国立町が国立市となる
平成 5	1993	JR 中央本線（三鷹～立川間）連続立体交差事業の都市計画浮上
		国立駅舎が国立市指定有形文化財（建造物）に指定される
平成 18	2006	国立駅舎を丁寧に解体し、市が部材を保管する
平成 22	2010	西国分寺～立川間高架化
平成 30	2018	旧国立駅舎再築工事着工
令和 2	2020	旧国立駅舎開業

箱根土地株式会社による開発

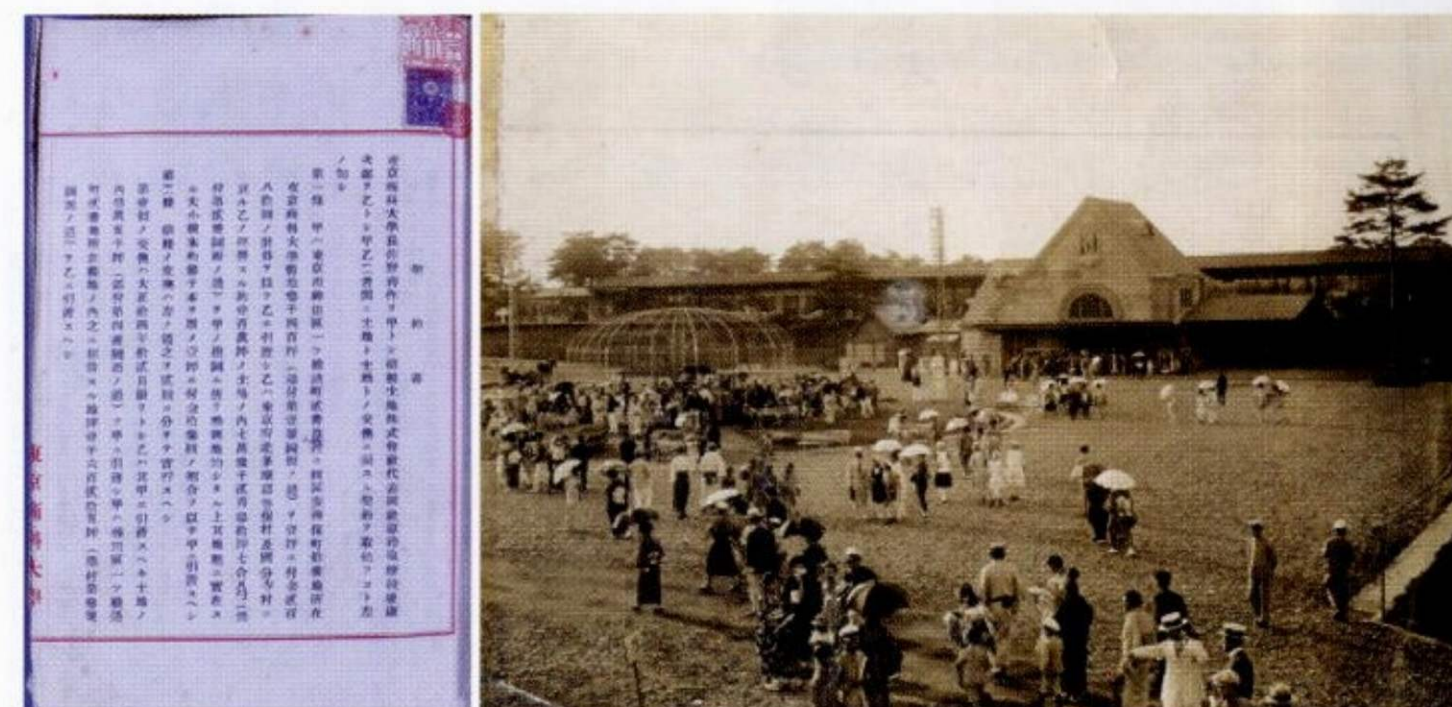
国立大学町は、国立駅と駅前広場を起点にそこから延びる幹線道路（大学通り）及び放射状の道路（旭通り、富士見通り）と基盤の目状の道路区画により、計画性の優れた特徴的な都市景観を形成しています。このように、駅や駅前広場、大学通りが一体的かつ象徴的に配置された国立大学町は、箱根土地株式会社による開発の中でも、最も完成度の高いまちといえます。



国立分譲地区画図 くにたち郷土文化館所蔵

土地交換契約と覚書

大正 14（1925）年、東京商科大学と箱根土地株式会社は土地交換契約と覚書を締結しました。この契約と覚書は、国立大学町のまちづくりの基本を決めた歴史的な文書です。覚書には、駅舎は外観を考慮して入念に建築することとされているほか、駅前広場を設けることや、大学通りの幅員について言及されているなど、駅、駅前広場、大学通りがまちの基軸として位置付けられていました。



土地交換契約書（一部）
一橋大学学園史資料室所蔵

国立駅前 大正 15（1926）年
くにたち郷土文化館所蔵